

世界牛病学会（ニース）に参加して

磯動物病院院長 磯日出夫

10月15~19日にニースで2年ごとに開催された世界牛病学会に参加してきました。開催地はフランス南部の地中海に面した位置にあるため、温暖な気候のリゾート地という雰囲気のところでした。学会はセクションごとの基調講演、ワークショップ、シンポジウム、フォーラム、セミナー、ポスターセッションと多彩な形式で、日本人の発表者もいました。講演は基本的には英語で行われました。参加者が非常に多く、企業展示ブースをはじめとして、どの会場も満席の状態でした。特に栄養の Dr.Goff の講演と外科セクションの腹腔鏡手術が人気でした。感想として最新情報の入手はもとより、世界中の開業獣医師と獣医大学教員との活発なディスカッションに触れたことが大きな収穫でした。ここでは外科セクションを中心に参加したので、第四胃変位の基調講演と腹腔鏡手術について紹介する。

1. 腹腔鏡手術：2ステップ法（Janowitz 1998）

2. 腹側腹腔鏡下第四胃固定術（Newman 2005）

1. 2. の詳細は「ウシの軟部組織外科」田口清・鈴木一由訳：獣医輸液研究会

3. 左側腹腔鏡下第四胃固定術（Christiansen 2004, Barisani 2004）

左けん部の前方、第11~13肋間の1ヶ所を剃毛・消毒・局所麻酔
メスで約1cm皮膚切開

左けん部の切開創に8mmのトロッカーを前方方向に設置、硬性鏡を挿入して第四胃の変位を確認

硬性鏡目視下で第11~13肋間から10mmトロッカー設置、套管針を第四胃に刺入し、
2本の糸付きトグルを挿入してから、ガス除去

体外に出したトグルの糸の先端を特殊な針を内筒とした先端に保持し、外套と一緒に腹部前方に移動する。

外套の先端で上腹部を押して、血管を避けた皮膚貫通位置を決定してから針を挿入する。

内筒の先端にでた2本の糸をガーゼをクッションとして結さつする。

皮膚の切開創3ヶ所に消毒剤を噴霧する。

10~30日後の抜糸

この術式は立位・短時間で行われ、牛への手術侵襲性が少なく、多くの場合は抗生物質の使用が不要であることから、今後普及するものとの講演でした。日本でも、特殊な器具の入手の問題があるとしても、外科手術で圧倒的に多い第四胃左方変位の処置法として本法は習得すべき術式と考えられた。また、牛の臨床現場で第四胃左方変位以外の腹腔鏡や乳頭内視鏡およびエコーなどをより活用して、日常の診療に使用することで診断および処置の精度がより高くなり、産業動物獣医師の信頼の向上に期待したい。